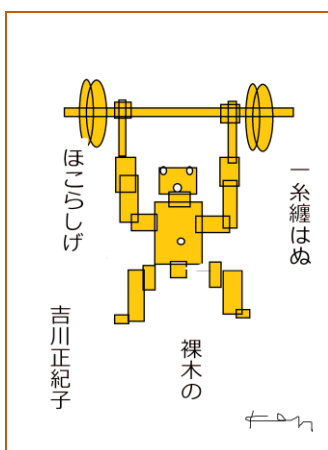


久々にポスト満腹賀状食べ

稲葉純子

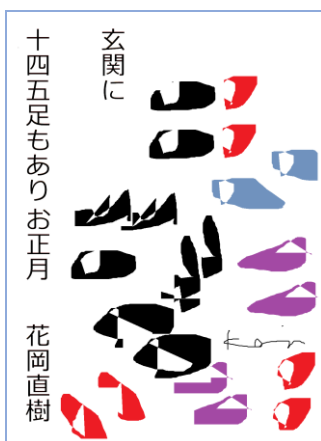
郵便ポストを上手く擬人化したね。最近はや賀状をやめてメールにする人も多いから、「メールには嫌悪感抱くポストかな」というところだろう。



一糸纏はぬ裸木のほこらしげ

吉川正紀子

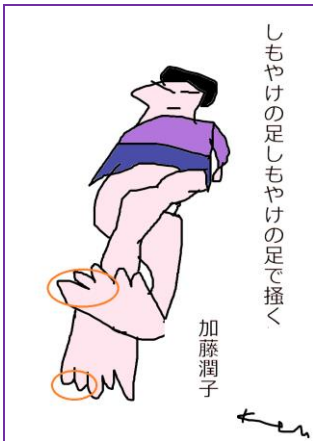
「一糸纏はぬ裸」となれば艶めかしいが、葉を落とした木のことである。堂々と逞しい幹なんじゃろう。拙句に「恋の猫一糸纏はぬ声を出し」がある。



玄関に十四五足もありお正月

花岡直樹

子規さんの鶏頭の句の「本句どり」だね。草履や下駄、散らばった子どもの靴の映像も浮かぶ。子規さんも、きっとクツクツと笑っとるじゃろう。



しもやけの足しもやけの足で掻く

加藤潤子

「しもやけ」を繰り返したことで、痒くて何度も掻く感じが出ている。やさしい作り方ではあるが読者の記憶の中にある「痒い」が共感を呼ぶ。



吾の逝く日あると思ふよ初暦

ほりもとちか

読んでぎくりとした。しかし、俳句は正直が一番。そして、「ちらと感じた」瞬間を描く。だから俳句で「事柄」はダメ。精神の記録ツールなんだ。



初接吻出会ひ頭の獅子舞と

桑田愛子

新年そうそう「接吻」とは楽しい句である。しかし、相手が獅子舞の獅子だから、すぐに離れないと噛まれるかもしれないね。